

厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業）
分担研究報告書

AYA 世代のがん患者に対するスマートフォンによる医療・支援モデル介入効果の検証
： ICT を駆使した新しい多職種支援モデルの開発

研究分担者 前田尚子 国立病院機構名古屋医療センター・小児科
研究協力者 北野敦子 聖路加国際病院・腫瘍内科
渡邊知映 昭和大学保健医療学部
桜井なおみ キャンサー・ソリューションズ株式会社
伊藤嘉規 名古屋市立大学病院・診療技術部
古川陽介 名古屋市立大学病院・緩和ケアセンター
服部文 一般社団法人 仕事と治療の両立支援ネット-ブリッジ
鈴木美穂 マギーズ東京

研究要旨：本研究では、AYA 世代の患者に適切な情報とセルフケアのスキルを提供可能とする ICT を駆使した新しい多職種支援モデルを開発する。そのために以下の 4 つの支援要素と新たな臨床試験システムを開発する。1. 個別性が高い AYA 世代がん患者のニーズや苦痛のスマートフォン(以下、スマフォ)上でのスクリーニング、2.スクリーニング結果に基づく適切なセルフケア情報提供を可能とするホームページの構築、3. スマフォを用いた問題解決療法の開発、4.スマフォを用いた多職種支援サービスの提供体制構築、以上を行い、これらを統合した多職種サービスの実施可能性と予備的有用性を検証することを目的とする。本分担研究では、本年度、4.スマフォを用いた多職種支援サービスについて検討し、既存の SNS ではなく、プライバシー保護のため、よりセキュリティを強化したシステム開発に着手した。次年度は、開発した多職種支援システムを用いて、スマフォを用いた支援法の実施可能性と予備的有用性を検討するために臨床試験を実施する。

A. 研究目的

15-39 歳の思春期・若年成人 (AYA) 世代がん患者は、国内で毎年約 2 万人が新規診断される。AYA 世代は就学・就労、結婚、妊娠出産育児などライフイベントが連続する世代であり、自己アイデンティティ形成過程にあって、意思決定やコミュニケーションスキルも成熟途上にあるため、心理社会的問題の影響が大きいとされる。そうした

年代でがんを経験することは、身体-心理社会-スピリチュアルなあらゆる側面に深刻な危機をもたらす。AYA 世代の死因の第 1 位は自死であり、うつ病罹患リスクも最も高い。このため適切な情報提供およびケアが重要であるにもかかわらず、効果的な心理社会的介入は存在しない。以上より、AYA 世代がん患者には良質な治療に加えて多職種支援が望まれる一方、相談支援や医療提

供体制の集約化に課題がある。AYA 世代は、インターネットなどに高い親和性を有しており、スマートフォン（スマフォ）を用いた支援法が開発されれば、適切かつ正確な情報に加え多職種支援を迅速に届けることを通して、がん罹患後の生活の質の維持・向上に寄与すると考えられる。

本研究全体の目的は、1. 個別性が高い AYA 世代がん患者のニーズや苦痛のスマートフォン（以下、スマフォ）上でのスクリーニング、2. スクリーニング結果に基づく適切なセルフケア情報提供を可能とするホームページの構築、3. スマフォを用いた問題解決療法の開発、4. スマフォを用いた多職種支援サービスの提供体制構築である。分担研究課題として、このうち 4. の多職種支援サービスの実施可能性と予備的有用性を検証することを目的とする。

B. 研究方法

AYA 世代（15-39 歳）のがん患者を対象に、国立がん研究センターおよび厚労科研・堀部班で AYA 世代がん患者を対象に開発した「苦痛のスクリーニングシート」を ePRO としてスマフォ上に搭載し、回答してもらう。回答者のうち、苦痛が強く支援を必要とする患者に「問題解決療法」を実践してもらう。また、本療法を適切に実施するため、新たに開発したスマフォシステムを用いて多職種支援サービスを行う。適格基準を満たし、同意が得られた患者 40 名について、「多職種支援サービス」の有無により 2 群に分けて、スマフォを用いた多職種支援の実行可能性、有用性を検証する。

C. 研究結果

当初多職種支援サービス提供体制の構築等で用いる SNS としてフェイスブックを予定していたが、班会議の際に、AYA 世代がよく用いる SNS はフェイスブックではないことに加え、一般にオープンにされているこれら SNS の仕組みはデータの帰属の問題（例えば、フェイスブック上でのやりとりはフェイスブック社（現 Meta 社）に帰属することになりデータ消去等を自由に行えないなど）やプライバシーの保護、セキュリティの観点から好ましくないため、これら懸念がより少ない方法を模索することになった。

当初 SNS を用いたピアサポートの提供体制の構築を含めていたが、班会議の際に、当事者代表である分担研究者および研究協力者から、ピアサポートの本質は当事者自身によるサポート体制の立ち上げ、構築、運営にあるため、本研究が計画していた医療者主導のものは当事者である患者が望む形ではないとの強い意見が寄せられ、研究者で相談し、本要素に関しては削除する形に変更した。

前述の議論、検討を経て、株式会社シェアメディカルと共同で、新たなシステム構築に着手した。本研究で使用するシステムは、分担研究者および研究協力者と研究参加の同意を得た AYA 世代がん患者のみが使用でき、患者同士が接することがないように設計する。

D. 考察

スマフォを用いたシステムの構築により、入院患者と異なり、多職種支援サービスを受ける機会が少ない外来通院中の AYA 世代がん患者の多様なニーズに迅速に対応がで

きる可能性が示唆された。

プライバシー保護、セキュリティの高いシステム構築のため、臨床試験開始までに十分な検討が必要である。

E. 結論

本年度は、多職種支援サービス提供のための SNS について既存のものではなく、新たに構築したセキュリティの高いシステムを用いることを決定し、現在システム構築中である。次年度は、システムの完成後に臨床試験を開始する。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

1) 前田尚子 堀部敬三 AYA 世代発症がんサバイバーの長期フォローアップ 第 59 回日本癌治療学会学術集会 2021.10.22 横浜

H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む。）

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし